

令和元年5月25日

KJFC 例会

『ジョン・コルトレーン特集』

～ただし、1963年まで～

担当：紅 我蘭堂

【はじめに】

本日は私の記憶に誤りがなければ40数年に亘るKJFC史上、前代未聞・前人未到・空前絶後・前後不覚(?)な例会となります。^{わたくし}私ごとですが、ちょうど今から50年前でしょうか。私が初めてジャズを聴き始めた頃にジャズ喫茶でよく掛かっていたのはコルトレーンの《クル・セ・ママ》とか《ライブ・アット・ザ・ヴィレッジバンガード》などのIMPULSE盤でした。コルトレーンの《セルフレスネス》とか《変遷》《至上の愛》などのレコードも買っていました。70年安保前後は、そういう時代でした。私も若かったです。

その後、私の好みはハードバップに移りました。なかんずくレッド・ガーランドというフニャフニャなピアニストを好きになるにつれてコルトレーンのIMPULSE盤は《セルフレスネス》と《バラード》以外は処分しました。『コルトレーンとの決別』とおおげさに表現してもよいでしょうか。

話しは逸れますが、いつもの乱暴な私見では、現在のテナー・サクソ界は洋の東西を問わずに大きな4本の潮流があります。ひとつはデクスター・ゴードンを源流とする男性的に豪快に吹きまくる流れ。ふたつ目はズート・シムスを中興の祖とする柔らかいタッチながら歌心を重要視する流れ。また三つめはソニー・ロリンズを基点として豪放ながら、時として限りなく女々しくなる流れ。そしてコルトレーンを宗祖と崇める流れの4本があります。私は人々のことを「〇〇派」とか「△△シスト」などと区別することは大嫌いですし、できません。それでも客観的に上記の流れはあるかなと思います。

コルトレーンの流れは中々太いです。誰とは言いませんが日本でも自らコルトレーンから影響を受けていると公言しているテナーサクソ・プレイヤーはいます。少なくとも宮沢 昭さん、峰 厚介さん、井上淑彦さんなどはそうでした。

コルトレーンは“怖い人”と誤解されています。前衛ジャズの教祖のような評価が優先されていますし、にらみつけるような強面(こわもて)なジャケット写真で損しています。昨年私が特集したルー・ドナルドソンのようにヘラヘラした写真ばかりでも、いかがなものですが、もう少し微笑みがあっても良かったかなと悔やまれます。晩年は世界中の憂鬱をひとりで背負い込んでいるような憂い顔の写真が多かった気がします。そういう写真が受けていた時代でもあったのです。

コルトレーンは恐らく約200枚ほどの膨大なレコードを残していると思われます。もちろんその中には死後発掘されたものも含まれますが、何と私も多分50枚ほど持っています。ガーランドやマイルス・

デイビスを集めているうちに自然に増えました。ふだん 50 年代中心のレコード聴いていると、コルトレーンは怖い人とは感じません。むしろブルース(12小節)感覚やバラード演奏における歌心溢れる節回しなど、とてもとても人間らしく聴けます。聴きやすいコルトレーン。私もこの機会にじっくりと聴き直してみたかったので今回の特集のテーマとして取り上げました。

(青字が本日聴いていただく曲となります)

【1955年】



'ROUND ABOUT MIDNIGHT/MILES DAVIS (COLUMBIA CL949)

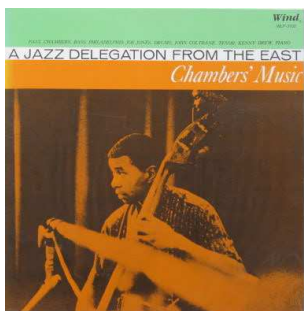
MILES DAVIS(tp) JOHN COLTRANE(ts) RED GARLAND(p) PAUL CHAMBERS(b)
“PHILLY” JOE JONES 1955年10月27日録音

SIDE A) 1. 'ROUND MIDNIGHT 2. AH-LEU-CHA 3. ALL OF YOU

SIDE B) 1. BYE BYE BLACKBIRD 2. TADD'S DELIGHT 3. DEAR OLD STOCKHOLM

マイルスの自叙伝によると 1955 年半ばに自分のバンドを結成したときのテナー・サクスはソニー・ロリンズが加わっていて、『カフェ・ボヘミア』などでライブ出演していたそうです。ところがロリンズが麻薬のために逮捕されたか治療を受けるためにバンドに参加できなかったために、ドラムスのフィリー・ジョー・ジョーンズがフィラデルフィアで共演していたコルトレーンを代役に紹介して、バンドの一員になったと記述されています。この数年前にも共演したことはあったそうです。人の出会いとは運命的なものです。歴史に“たら、れば”は絶対に禁物ですが、この時もしロリンズが加わっていたら、ジャズシーンはいったいどうなっていたのか、暇な時には興味津々になります。

【1956年】



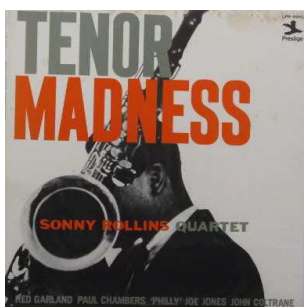
CHAMBERS' MUSIC (JAZZ WEST LP-7)

PAUL CHAMBERS (b) JOHN COLTRANE (ts) KENNY DREW (p) “PHILLY” JOE JONES (ds) 1956年3月録音

SIDE 1) 1. DEXTERITY 2. STABLEMATES 3. EASY TO LOVE

SIDE 2) 1. VISITATION 2. JOHN PAUL JONES 3. EASTBOUND

マイルス・クインテット他で共演している盟友ポール・チェンバースのリーダー・アルバムにも律儀に付き合っています。この JOHN PAUL JONES という曲のタイトルはもちろんコルトレーンとチェンバースとフィリー・ジョー・ジョーンズから取っていますが、何となく聴いたことのあるフレーズです。



TENOR MADNESS/SONNY ROLLINS (PRESTIGE 7047)

SONNY ROLLINS (ts) JOHN COLTRANE (ts) [SIDE 1 1のみ] RED GARLAND (p)
PAUL CHAMBERS (b) “PHILLY” JOE JONES (ds) 1956年5月24日録音

SIDE 1) 1. TENOR MADNESS 2. WHEN YOUR LOVER HAS GONE

SIDE 2) 1. PAUL'S PAL 2. MY REVERIE 3. THE MOST BEAUTIFUL GIRL IN THE WORLD

マイルスは自分のバンドにロリンズを望んでいましたが、残念ながらロリ

ンズが麻薬で刑務所に入っていたのでコルトレーンを起用したという話しは前述しました。共演したのはこのアルバムの1曲だけでしょうか。二人の違いが私にも分かるほど個性的な演奏です。



TENOR CONCLAVE (PRESTIGE 7074)

HANK MOBLEY (ts) AL COHN (ts) ZOOT SIMS (ts) JOHN COLTRANE (ts) RED GARLAND (p) PAUL CHAMBERS (b) ART TAYLOR (ds) 1956年9月7日録音

SIDE A) 1. **TENOR CONCLAVE** 2. JUST YOU, JUST ME

SIDE B) 1. BOB'S BOYS 2. HOW DEEP IS THE OCEAN

4人の個性の聴き比べが楽しい曲です。モブレイ、コーン、シムスそしてコルトレーンなら耳の悪い私でも聴き分けられます。余談ですが私、こういうテナーバトルというのでしょうか、お互いに負けてなるものかと吹きまくる演奏は大好きです。

【1957年】



COLTRANE/JOHN COLTRANE (PRESTIGE 7105)

JOHN COLTRANE (ts) PAUL CHAMBERS (b) AL HEATH (ds) RED GARLAND (p) [SIDE1のみ] MAL WALDRON (p) [SIDE2のみ] JOHNNIE SPLAWN (tp) [SIDE1 1, SIDE2 1. 2. 3] SAHIB SHIHAB (bs) [SIDE1 1, SIDE2 1. 3] 1957年5月31日録音

SIDE 1) 1. BAKAI 2. **VIOLETS FOR YOUR FURS** 3. TIME WAS

SIDE 2) 1. STRAIGHT STREET 2. WHILE MY LADY SLEEPS 3. CHRONIC BLUES

1956年10月にコルトレーンはマイルス・クインテットをクビになります。原因はコルトレーンの麻薬と大酒。しかしまた12月には復帰したそうです。しばらくライブやツアー活動をしていたようですが、1957年3月に再度クビになります。麻薬の常習癖は相当ひどかったようです。その後はセロニアス・モンクと共演しますし、食べるために様々なレコーディングに参加しています。一説によるとモンクの紹介でPRESTIGEレコードと契約でき、満を持して吹き込んだのが、このファースト・アルバムという触れ込みです。



THE THELONIOUS MONK QUARTET FEATURING JOHN COLTRANE

LIVE AT THE FIVE SPOT DISCOVERY (BLUE NOTE <東芝> TOCJ-5751)

THELONIOUS MONK (p) JOHN COLTRANE (ts) AHMED ABDUL-MALIK (b) ROY HAYNES (ds)

1957年8月録音(推定)

1. **TRINKLE TINKLE** 2. IN WALKED BUD

3. I MEAN YOU 4. EPISTROPHY 5. CREPUSCURE WITH NELLIE

モンクとの記録(レコード)はRIVERSIDEレコードに若干残っています。それはそれで結構なものかと思いますが、このCDの方がライブ録音ということで、より生々しいです。マイルスをクビになったコルトレーンを拾い上げて自分のコンボに入れたのがモンク。モンクはコルトレーンの才能を高く評価していたという説がジャズ界に根付いています。真実は実際に聴いてみないと不明ですが、若干その雰囲気分かりそうなのが、このCDです。コルトレーンの奥さんがテープを回していたということですので音質は非常に悪いです。この曲、コルトレーンが吹いている最初のうちモンクはバックアップというのでしょうかポロロン、ポロロンとピアノでアクセントを付けていますが途中

で止めてしまいます。あたかもコルトレーンの演奏に聴きほれて邪魔をしないように控えている様子に受け取れます。それほどに「空間を、オレー人の音で埋め尽くしてやる!!」という気迫が伝わってくる演奏です。



TRANEING IN (PRESTIGE 7123)

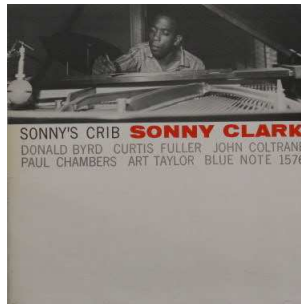
JOHN COLTRANE (ts) RED GARLAND (p) PAUL CHAMBERS (b) ART TAYLOR (ds)

1957年8月23日録音

SIDE 1) 1. **TRANEING IN** 2. SLOW DANCE

SIDE 2) 1. BASS BLUES 2. YOU LEAVE ME BREATHLESS 3. SOFT LIGHTS AND SWEET MUSIC

レッド・ガーランドのピアノが続いて申し訳ありません。見苦しい言い訳ですが、ガーランドのレコードを集めているうちに、もれなくコルトレーンとマイルスが付いてきてしまいました。この曲は冒頭の3分以上ガーランドのソロが続き、そろそろさすがに飽きてきた頃合いを見計らって、満を持してコルトレーンが飛び出していきます。そのフレーズがかっこいいです。



SONNY'S CRIB (BLUE NOTE 1576)

DONALD BYRD (tp) JOHN COLTRANE (ts) CURTIS FULLER (tb) SONNY CLARK (p) PAUL CHAMBERS (b) ART TAYLOR (ds) 1957年9月1日録音

SIDE 1) 1. WITH A SONG MY HEART FOR YOU 2. **SPEAK LOW**
3. COME RAIN OR COME SHINE

SIDE 2) 1. SONNY'S CRIB 2. NEWS FOR LULU

ソニー・クラークとのコンビももっと多くのレコードを聴いてみたかった組み合わせです。



BLUE TRAIN/JOHN COLTRANE (BLUE NOTE BST-1577)

LEE MORGAN (tp) JOHN COLTRANE (ts) CURTIS FULLER (tb) KENNY DREW (p) PAUL CHAMBERS (b) "PHILLY" JOE JONES (ds) 1957年9月15日録音

SIDE 1) 1. **BLUE TRAIN** 2. MOMENTS NOTICE

SIDE 2) 1. LOCOMOTION 2. I'M OLD FASHIONED 3. LAZY BIRD

1957年はコルトレーンにとって酷い年あるいは波乱万丈の年といえました。が、ある意味では充電期間だったと無責任な私は言えます。繰り返しになりますが、マイルスにはクビになりながらモックのグループに参加でき、やはりマイルスをいったん解雇されたガーランドとPRESTIGEにレコードを吹き込んでいました。またマイルス・グループでの活動が評価されていて、レーディングなど方々からオファーがあったらしいです。BLUE NOTE レコードのアルフレッド・ライオンはすかさず9月にコルトレーンを抱き込んでレコードを創らせました。このリーダー・アルバムは実によく考えられているメンバーを集めたと思います。リズム・セクションは前に掛けたポール・チェンバースの JAZZ WEST 盤です。リー・モーガンとカーティス・フラーを加えて音楽に厚みを加えたところなんか、ライオンさんニクいです。

【1958年】



1958 MILES/MILES DAVIS (COLUMBIA [JAPAN] 20AP 1401)

MILES DAVIS (tp) JOHN COLTRANE (ts) JULIAN “CANNONBALL” ADDERLEY (as)
SIDE1) 1, 2. SIDE2) 1のみ BILL EVANS (p) [SIDE2) 2を除く]

RED GARLAND (p) [SIDE2) 2のみ] PAUL CHAMBERS (b)

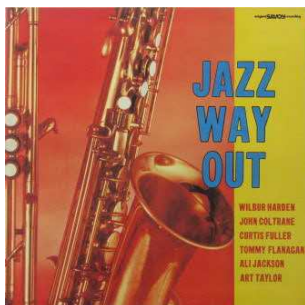
JIMMY COBB (ds) [SIDE2) 2を除く] “PHILLY” JOE JONES (ds) [SIDE2)のみ]
SIDE2) 2 1955年10月27日録音 他は1958年5月26日録音

SIDE1) 1. ON GREEN DOLPHIN STREET 2. FRAN-DANCE

3. STELLA BY STARRIGHT

SIDE2) 1. LOVE FOR SALE 2. LITTLE MELONAE

マイルスのレコードも多くなって申し訳ありません。1955年から1960年にかけてコルトレーンはマイルスに雇われたりクビになったりを繰り返していました。その理由の大半はコルトレーンの麻薬。ただしマイルスにとってコルトレーンの存在は必要だったのだと認識できます。クビにしても再三雇っていますし、最後にコルトレーンが独立しようとした時には引き留めてもいます。



JAZZ WAY OUT/WILBER HARDEN (SAVOY MG-12131)

WILBUR HARDEN (FLEUGELHORN) JOHN COLTRANE (ts) CURTIS FULLER (tb) TOMMY FLANAGAN (p) ALI JACKSON (b) ART TAYLOR (ds) 1958年6月24日録音

SIDE 1) 1. DIAL AFRICA 2. OOMBA

SIDE 2) GOLD COAST

1958年から突如としてトランペット(フリューゲルホーン)奏者のウィルバー・ハーデンとの共演が増えます。正規発売されたアルバムだけでも、SAVOYレーベルにハーデンのリーダー・アルバムが6枚(共作名義含む)。プレステッジにコルトレーンのリーダー名義で3枚が確認されています。ウィルバー・ハーデンという人はSAVOYレーベルに「王様と私」の素晴らしいワンホーン・カルテット作品を残して私は好感を持っています。いますが、こう言っでは失礼ながらコルトレーンとの接点がよく理解できません。まあ我々など二人の関係をウンヌンカンヌンすることじたいおこがましいのですが。客観的・批評的に言えば、後年におけるコルトレーンのいわゆる“アフリカ回帰”というコンセプトはこの人からの共演で生まれたとも言われています。



STANDARD COLTRANE/JOHN COLTRANE (PRESTIGE 7243)

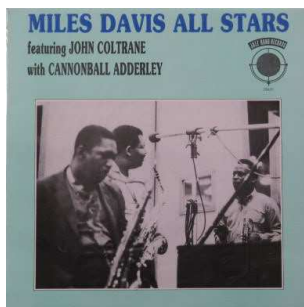
JOHN COLTRANE (ts) WILBER HARDIN (tp) RED GARLAND (p) PAUL CHAMBERS (b)
JIMMY COBB (ds) 1958年7月11日録音

SIDE 1) 1. DON'T TAKE YOUR LOVE FROM ME 2. I'LL GET BY

SIDE 2) 1. SPRING IS HERE 2. INVITATION

このレコードを聴いていると、コルトレーンは一時期デクスター・ゴードンに憧れて同じように吹くことを目指していたのではないかと錯覚してしまいます。それほどコルトレーンの音色は男性的です。このアルバムもウィルバー・ハーデンをメンバーにしています。スローなバラード演奏とミディアム・テンポのスタンダード曲に聴き惚れるばかりです。

【1959年】



MILES DAVIS ALL STARS (JAZZ BAND EB409)

SIDE 1) : MILES DAVIS(tp) JOHN COLTRANE(ts) JULIAN “CANNONBALL”
ADDERLEY(as) RED GARLAND(p) PAUL CHAMBERS(b)
“PHILLY” JOE JONES(ds) 1959年1月3日録音

SIDE 2) : MILES DAVIS(tp) JOHN COLTRANE(ts)
JULIAN “CANNONBALL” ADDERLEY(as) RED GARLAND(p)
PAUL CHAMBERS(b) JIMMY COBB(ds) 1959年2月録音

SIDE 1) 1. WALKIN' 2. ALL OF ME

SIDE 2) 1. SID'S AHEAD 2. BYE BYE BLACKBIRD 3. STRAIGHT NO CHASER

レッド・ガーランドを追いかけて夢中になってレコードを買い集めていたら、このようなレコードも手に入ってしまった。マイルス・セクステットのライブ盤は希少なので、あえて掛けます。音質も悪くはないです。余談ですがもっとひどい音質のCDも持っています。私にはコルトレーンとキャノンボールの二人が個性を出しつつ、お互いのいいところ取りをしているように思えます。



CANNONBALL ADDERLEY QUINTET IN CHICAGO (MERCURY MG-20449)

JULIAN CANNONBALL ADDERLEY(as) JOHN COLTRANE(ts) WYNTON KELLY(p) PAUL
CHAMBERS(b) JIMMY COBB(ds) 1959年2月3日録音

SIDE 1) 1. LIMEHOUSE BLUES 2. STARS FELL ON ALABAMA 3. WABASH

SIDE 2) 1. GRAND CENTRAL 2. YOU'RE A WEAVER OF DREAMS 3. THE SLEEPER

マイルスの有名な『KIND OF BLUE』(COLUMBIA)というレコードの、マイルス親分抜きの録音。マイルスがいるといないのでは、こうも違うのかと感心させられます。ペアペア吹きまくるキャノンボールと生真面目に演奏するコルトレーンとでは水と油のような先入観がありますが、なかなかどうして躍動感のある相性抜群な聴き応えがあります。うがった見方ですが、コルトレーンもキャノンボールから得るところが多かったように思います。機会があれば是非このレコードと『KIND OF BLUE』を聴き比べてください。



GIANT STEPS/JOHN COLTRANE (ATLANTIC LP1311)

SIDE 1) : JOHN COLTRANE(ts) TOMMY FLANAGAN(p) PAUL CHAMBERS(b)
ART TAYLOR(ds) 1959年5月4日, 5日録音

SIDE 2) : JOHN COLTRANE(ts) WYNTON KELLY(p) PAUL CHAMBERS(b)
JIMMY COBB(ds) 1959年12月2日録音

SIDE 1) 1. GIANT STEPS 2. COUSIN MARY 3. COUNTDOWN 4. SPIRAL

SIDE 2) 1. SYEEDA'S SONG FLUTE 2. NAIMA 3. MR. P. C.

1959年のコルトレーンであれば、このレコードは掛けないわけにはいきません。前述した70年安保前後当時に、良いか悪いか・好きか嫌いかも分からずにジャズに聴き入っていたころ、何故かこのGIANT STEPSには理由も分からず共感しました。

【1961年】



BALLADS/JOHN COLTRANE (IMPULSE)

JOHN COLTRANE (ts, ss) McCOY TYNER (p) JIMMY GARRISON (b) ELVIN JONES (ds)

1961年12月21日, 1962年11月13日録音

JOHN COLTRANE (ts, ss) McCOY TYNER (p) ART DAVIS (b) ELVIN JONES (ds)

1962年9月18日録音

SIDE 1) 1. SAY IT (OVER AND OVER AGAIN) 2. YOU DON'T KNOW WHAT LOVE IS
3. TOO YOUNG TO GO STEADY 4. ALL OR NOTHING AT ALL

SIDE 2) 1. **I WISH I KNEW** 2. WHAT'S NEW 3. IT'S EASY TO REMEMBER
4. NANCY (WITH THE LAUGHING FACE)

やはり余りにも有名なアルバムを掛けます。全曲掛けたいところですが1曲だけ聴いてください。少しテナー・サクスの調子はあまりよくないようです。

【1962年】



COLTRANE (IMPULSE AS-21)

JOHN COLTRANE (ts, ss) McCOY TYNER (p) JIMMY GARRISON (b) ELVIN JONES (ds)

1962年4月11日録音

SIDE 1) 1. OUT OF THIS WORLD 2. SOUL EYES

SIDE 2) 1. THE INCH WORM 2. TUNJI (TOON-GEE) 3. **MILES' S MODE**

この年あたりからのコルトレーンには、ちょっと付いていけないところが私にはあります。このレコードも例えばスタンダード曲と思える「OUT OF THIS WORLD」など、わざと複雑なリズムをエルビン達に取らせて『けれんみ』を表現しているようです。で、途中から私は聴けなくなります。でも『MILES' S MODE』だけは何かマイルスへの尊敬あるいは感謝の念が感じられて聴くことができます。

【1963年】



SELFLESSNESS (IMPULSE AS-9161)

JOHN COLTRANE (ts, ss) McCOY TYNER (p) JIMMY GARRISON (b) ROY HAYNES (ds)

1963年7月7日録音 ※SIDE 2) 2)は省略

SIDE 1) 1. **MY FAVORITE THINGS**

SIDE 2) 1. I WANT TO TALK ABOUT YOU 2. SELFLESSNESS

私のコルトレーンは、このレコードまでです。これから先にはいけません。個人的な話で恐縮ですが70年安保前後の混沌とした時には神保町の『響』や『コンボ』で何回も何回もリクエストしたものです。しかもサイド1面だけです。今夜はこの曲で締めましょうか。

ご清聴ありがとうございました